

周 期 的 恐 慌

— 1836—37 年の恐慌を中心として —

玉 野 井 芳 郎

「工場制度の巨大で飛躍的な擴張可能性とその世界市場への依存性とは、必然的に熱病的な生産とそれにつづく市場の充溢をうみ出し、市場の収縮とともに麻痺状態が生ずる。産業の生活は、中位の活況・繁榮・過剰生産・恐慌・停滞の諸時期の一列に轉化する。」¹⁾ このマルクスの規定は、確立期の資本主義がうみ出した 19 世紀の 20 年代から 60 年代までの周期的恐慌現象において典型的に確定される。周知のごとく当時のイギリス資本主義の代表的産業は綿工業であった。イギリスの綿工業は大體 1815—30 年に産業資本として確立したとみてよいであろう。この時期に紡績業を中心として機械制大工業が成立し、原綿の消費量と綿製品の輸出量は飛躍的に増大した。いわゆるマニファクチュア時代の羊毛工業のばあいと異なって、原料棉花はこのばあいイギリス國內ではなくてアメリカおよびヨーロッパ諸國にもとめられるとともに、主要食糧たる穀物もまた海外にもとめられて、かくて綿工業を基軸としたイギリス資本主義は、原料および食糧などの農産物を輸入してかわりに工業製品を輸出するといった國際的分業關係をつくり出すことによってその現實的基礎を確立したのであった。それと同時にこうした新たな世界市場を前提として、はやくも

25 年から典型的な恐慌現象をうみ出すにいたった。本稿では、このような 19 世紀 20 年代から 60 年代にいたる、産業資本の支配的な確立期の資本主義に固有な恐慌型態の一端を明らかにすることを目的として、1836—37 年の恐慌をとりあげ、これを中心として好況・恐慌・不況という現實の循環過程の経過段階を考察し、周期的恐慌としての一般性とその型態的特徴を明らかにしたいとおもう。

I.

1836—37 年の恐慌は 1835 年および 36 年の繁榮のあとをうけて爆發した産業恐慌である。われわれはまず、この繁榮に先行した 1833—34 年の好況第一局面について、それが 1825—26 年の恐慌につづいた沈滞を基礎としてどのように準備されたかを觀察することからはじめよう。

「1833 年の委員會における一棉花、羊毛、鐵および船舶に関する一證言は、この時期 (1827—32 年) を、物價および利潤の低落、増大する苛烈な競争、産出高の上昇の時期とさだめる點でまったく一致している。」²⁾ たとえば原綿、綿絲およびキャラコの價格の推移をみるとつぎのようである³⁾ (第 1 表)。1827—32 年の不況過程には、

第 1 表

年	撚絲の平均販賣價格 (30-hankswater-twist of common quality [封度])		緯絲の平均販賣價格 (40-hanks cop weft [封度])		經絲の平均販賣價格 (four-cut warp)		原 綿 價 格 (税込) (ヘンス單位封度)	キャラコの平均販賣價格 (3rd 74's calico)	
	シリング	ヘンス	シリング	ヘンス	シリング	ヘンス		シリング	ヘンス
1826	1	1	1	1	11	$2\frac{1}{2}$	7.6	6	$3\frac{1}{4}$
1827	1	$0\frac{1}{2}$	1	$0\frac{1}{2}$	10	$3\frac{1}{4}$	6.8	6	6
1828	1	$0\frac{1}{8}$	0	$11\frac{3}{4}$	10	$0\frac{1}{2}$	6.3	6	$5\frac{1}{4}$
1829	1	$0\frac{1}{2}$	0	$11\frac{3}{4}$	9	$9\frac{1}{4}$	6.5	5	8
1830	1	$0\frac{1}{4}$	1	$0\frac{1}{4}$	10	$1\frac{1}{2}$	6.8	6	$3\frac{1}{4}$
1831	0	$10\frac{1}{2}$	0	$11\frac{1}{4}$	9	$1\frac{1}{2}$	6.7	6	$2\frac{1}{4}$
1832	0	$11\frac{3}{4}$	0	$11\frac{1}{4}$	9	$8\frac{3}{4}$	7.2	5	8

1) Marx, *Das Kapital*, herausgeb. v. Adoratskij, Bd. 1., S. 476 邦譯岩波文庫版 (3) 248 頁

2) Gayer, Rostow, Schwartz, *The Growth and Fluctuation of the British Economy 1790—1850*,

この数字からもある程度は推定されるように軽微な變動がふくまれている。すなわち1827年から28年にかけてのわずかな改善、29年の沈滞、30年および31年はじめの一時的改善、31—32年の再度の沈滞など⁴⁾。しかし「物價および利潤の持続的低落傾向がこれらの年の産業諸報告を占めていた。」⁵⁾市場割引率(オーヴァレンド・ガ

第 2 表

1826	4.50 (%)
1827	3.25
1828	3.04
1829	3.38
1830	2.81
1831	3.69
1832	3.15

ーナー商會の第一級手形の割引率)は左表の示すように1826年の最高水準4.5%から一躍下落して大體3%臺を上下しているにとどまる。⁶⁾(第2表)これは、25—26年の恐慌後の現實的蓄積の停滯が資金形態での蓄積の増大としてあらわれたものにほかならない。貨幣貨銀もむろん低落傾向を示している。

以上のような不況過程には、なおこのほかに不況から積極的に脱する方法が採用されている事実が有力に存する。それは物價および利潤の低落を契機として、不況期における深刻な競争をとおして強制される、生産方法の改善による生産費の引き下げである。「ある見方からすれば、1825年の恐慌はむしろイギリス産業に良い作用をあたえた。1833年の議會委員會における製造業者スマイスの証言によれば、この恐慌後によりやく蒸氣機械がイギリスの工場のいたるところで使用されるにいたった。同様に熔鑄業においても、1825年以後、重要な改良がほどこされて、製造業者ティルの判断によると、それは鐵の生産費をいちじるしく低下せしめた。物價の下落から生じた利益の減退は製造業者をして生産の費用を少なくする手段を探求せしめるにいたった。かくて1825年の恐慌につづく諸年は技術の急速な進歩をもってその特徴とした。」⁷⁾「1825年につづく數年間にも、新たな技術的可能性を利用せんとする強力な生産費引下げの誘因があった。」⁸⁾「この時代の著述家たちは、1833年までに生じた生産擴張が主として利潤の低水準を動機としたということ、しばしば、また疑問の餘地をのこさぬほどに強調している。」⁹⁾「工場の完全な再建を要する技術的進歩

1953, Vol. I, pp. 221—222

3) *ibid.*, p. 223

4) *ibid.*, p. 226

5) *ibid.*, p. 225

6) *ibid.*, p. 235

7) Tougan-Baranowsky, *Les Crises industrielles en Angleterre* 1913, p. 60 鍵本博譯『英國恐慌史論』59—60頁

8) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 222

9) 10) Matthews, *A Study in Trade-Cycle History*

を利用することがなにかの理由で不可能であった工場でも、既存の機械の適應を必要とするだけの設備更新(Innovations)によって利潤をあげることができた。この種の更新はかなり多數あった。¹⁰⁾いま1812年と1830年における綿絲の紡績費用(單位封度)の比較をみるとつぎのようである(第3表)。生産費の低下は輸入原料

第 3 表

種 類	1812		1830	
	シリング	ペンス	シリング	ペンス
No. 40	2	6	1	2 $\frac{1}{2}$
60	3	6	1	10 $\frac{1}{2}$
80	4	4	2	6 $\frac{3}{4}$
100	5	2	3	4 $\frac{1}{4}$
120	6	0	4	0
150	9	4	6	7
200	20	0	14	6
250	35	0	28	2

價格の低落と生産方法の改善にもとづくものであった。

11) もちろん一般に新機械の採用および改良のおこなわれる生産部面とその時期とは産業の種類によって異なる。周知のごとく綿工業における織布部門の機械化は緩慢に進行し、それが壓倒的に普及したのは30年代以後に屬する。ここではただ不況期の競争過程をとおして技術的改善が進行した事實を指摘するにとどめたい。

1833—34年における産業の一般的恢復は、大體以上のような物價、貨銀、利潤および利子の低落と、そのもとでおこなわれた生産設備の改善をとおして準備されたとみることができる。この好況期の出發點において當然生ずる産業資金の需要増加はただちに利子率に反映している。1833—34年の各4半期における平均市場割引率の

第 4 表

	イングランドおよびウエールスで組まれた爲替手形の額 (£m)	手形の平均市場割引率 (%)
1833: I	50.8	2.5
II	48.3	2.9
III	51.6	2.7
IV	68.1	3.3
1834: I	53.3	3.1
II	50.9	3.1
III	55.6	3.5
IV	51.8	3.8

— *Economic Fluctuations in Great Britain 1883—1842*, 1954, p. 133 p. 131

11) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 223

變動と商業信用の變化は上掲のようである(第4表)¹²⁾。33年の第4四半期には割引率は3.3%に上昇している。しかしまたこの時期にはすでに商業信用も擴張されて、手形量は68.1に増大しており、他方では再生産の活潑化にもとづく資金の形成も増大したとみることができるのであって、34年の第1, 第2, 各四半期には割引率はふたたび3.1%に低落している。この低水準の利子率で示される金融緩慢を前提として34年末から好況第二局面が始まるのである。

II.

1830年代のブームの特色は對アメリカ輸出の異常な増進にあった。この點を考察するにさき立って、ブームの起點をなしたところの金融緩慢を契機として生じた2つの顯著な好況期の個別的誘因を指摘しておかねばならない。一つは外國有價證券にたいする投機的取引であり、一つはイギリス國內の鐵道建設事業とそれに伴った株式投機である。

外國證券投機が大規模におこなわれたのは1820年代のブームのときである。それは、ロンドンにおける中、南米諸國の國債募集からはじまって、これら諸國の鑛山株を中心とした熱狂的な證券投機を現出し、25—26年の恐慌に特殊の様相をきざむものとなったのであるが、こうした外國證券投機は30年代のブームにおいてはもはやそれほど有力な要因をなすものとはいえなくなっている。主として1833年以後スペイン、ポルトガル、ロシアなどの國債が多量にロンドンにもち込まれて外國證券取引は活潑化しているが、なかんずくアメリカ合衆國にたいする外國貸付はいちじるしく大きく、35年末の合衆國への投資額は6千6百萬ドルにのぼり、つづく3年間にはこれに1億8百萬ドルが加わったといわれる¹³⁾。「ヨーロッパの資本の援助がなかったならば、合衆國はこの時期にはじまった多數の鐵道および運河の建設を企てえなかったであろう。北アメリカの鐵道株および他の企業株の大部分はイギリスに捌口をみいだした。このようにして得られた資金は、北アメリカにおいて、一部は商工業の擴張のために(資本の流入は多數の産業企業を發生せしめた)使用されたが、しかし一部の資本はまた取引所にのこり、あらゆる種類の投機を助長した。使用しうべき資本の過剰は多數の新銀行の設立をうながした。」¹⁴⁾

すでにアメリカでは、1829年に州有地の賣却がさかんとなり、30年には鐵道の建設が開始されたのであるが、金融困難のために一時中斷を餘儀なくされたのち、34年以後になって、いわゆるジャクソン・インフレーションがはじまった。このブームは銀行の新設によっていちじるしく助長され、それはやがて土地賣買を中心とするはげしい投機となってあらわれたのであって、のちにもふれるように、この投機の破綻と關連したアメリカの金融逼迫こそが1836—37年のイギリスの恐慌の導火線をしたのである¹⁵⁾。

しかし、1824—25年のラテン・アメリカにたいする外國貸付にはじまった‘foreign boom’にたいして、1833—34年は‘domestic boom’といわれる¹⁶⁾ように、30年代のイギリスのブームの誘因としては、そうした外國證券取引よりもむしろ國內の鐵道建設のほうが比重が大きかった。鐵道建設が‘mania’の徴候を示しはじめた

第5表

年	會社數	哩數	公稱資本 (£m)
1833	4	218	5.5
1834	5	131	2.3
1835	8	201	4.8
1836	29	955	22.9
1837	15	543	13.5
1838	2	49	2.1
1839	2	54	6.5

のは1835年の後半以後においてである。鐵道條例によって認可された會社數、哩數、資本額は左のようになっている¹⁷⁾(第5表)。なおここで「1843年12月31日前的鐵道諸

第6表

調達總資本	66 (£m)
株式による調達資本	44
借入による調達資本	22
公稱資本	86

會社の資本調達」をみるとつぎのようである¹⁸⁾(第6表)ところで、

外國證券投機のほうははやくも35年5月にはスペイン公債への投機の破綻をうみ出して取引所パニックを惹起するにいたった。しかしこの「ロンドン證券取引所のパニックは投機者たちの狭い範圍に限られ、けっして他の層の人々にまでは及ばなかった。したがってこのパニックは産業の繁榮をさまたげえなかった。トックによれば、商品市場は1836年まではなんら異常な興奮の徴候を示さなかった。1836年に状態は變化した。商工業の繁榮は投機熱に墮した。1825年の投機が主として外國

12) Matthew, *ibid.*, p. 201

13) Jenks, *The Migration of British Capital*, 1927, p. 85

14) Tougan-Baranowsky, *ibid.*, pp. 62—63 邦譯 62 頁

15) Matthews, *ibid.*, pp. 45—49

16) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 243

17) Matthews, *ibid.*, p. 107

18) *ibid.*, p. 121

企業を對象としたのにたいし、1836年にはイギリス自身から生じた諸企業について投機がなされた。……1825年にはロンドン取引所における投機物の花形となったのはメキシコおよび南アメリカの鑛山株であったが、1836年にはイギリスの鐵道およびイギリスの個人銀行の株であった。」¹⁹⁾

このような鐵道企業を中心とした‘joint stock mania’はこの時期の金融市場との關連において考察されねばならない。さきにみたように、1834年の第1, 第2, 四半期

第 7 表

年 次	市場割引率 %	株 式 價 格 (1840年6月=100)	株式會社設 立趣意書數
1835年 1月	$3\frac{3}{4}$	104.0	2
2	$3\frac{1}{4}$	104.1	8
3	$3\frac{1}{2}$	105.1	6
4	$3\frac{3}{4}$	107.6	1
5	$3\frac{3}{4}$	101.8	1
6	4	98.9	—
7	4	101.8	2
8	$3\frac{1}{2}$	101.9	3
9	$3\frac{3}{4}$	102.1	8
10	$3\frac{3}{4}$	106.2	4
11	$3\frac{3}{4}$	108.8	8
12	$3\frac{3}{4}$	110.0	3
1836年 1月	$3\frac{3}{4}$	117.9	11
2	$3\frac{3}{4}$	123.5	13
3	$3\frac{1}{2}$	125.2	11
4	$3\frac{1}{4}$	125.9	29
5	$3\frac{1}{4}$	133.7	22
6	4	129.9	22
7	4	124.5	18
8	$4\frac{1}{2}$	128.1	2
9	5	126.7	8
10	5	122.0	5
11	$5\frac{1}{2}$	112.9	2
12	$5\frac{1}{2}$	115.7	3

19) Tougan-Baranowsky, *ibid.*, pp. 65—66 邦譯 65 頁

に平均率 3.1 % に低落した市場割引率は、その後上昇傾向をたどって 35 年の 6, 7 月には 4 % に達したが、外國爲替相場の改善にともなつた地金の流入を反映して 8 月以後はふたたび 3 % 臺に低落した²⁰⁾。そして翌 36 年の 4 月および 5 月における最低點 ($3\frac{1}{4}$ %) の時期に株式投機熱は頂點に達したのであった。この間の消息は左記の表に明らかである²¹⁾(第 7 表)。この表には利子率の變動と、擬制資本を表示する株式價格の變動との必然的な對應關係が端的に示されている。

投機は鐵道のほかに銀行、保險會社および鑛山などの

第 8 表

	公稱資本 (£m)
鐵 道	69.7
鑛 山	7.0
船 舶	3.5
銀 行	23.8
運 送	0.5
保 險	7.6
投資會社	1.7
新 聞	0.3
運 河	3.7
ガ ス	0.9
墓 地	0.4
そ の 他	16.1
	135.2

株についておこなわれた。1834

—36 年に企畫された株式會社の資本額および企業分布はつぎのようである²²⁾(第 8 表)。もっとも 36 年の鐵道マニアは概して ‘promotion boom’ であつて、‘construction boom’ ではなかつた。それゆへこうした鐵道建設のための現實の支出が増大するまでにはその後數カ年を要したのであつて、35—36 年における投資支出の増大はそれ以前に企畫され、そして建設段階にはいった鐵道について生じたものであつた²³⁾。こうした鐵道建設事業がブームにとって最も

積極的な意義をもつたのは、30 年代よりも 40 年代においてである。このばあいも大規模な鐵道投機が 1844 年からはじまつて 45 年に頂點に達し、「マンチェスターなどの商人や製造業者はかれらの正常な事業資金の一部を鐵道株に固定させ、したがつてかれらの事業を遂行するためには借入資本に依存した²⁴⁾」ほどであつた。そうした鐵道建設事業を有力な一要因とした繁榮のあとをうけて 47 年の恐慌が惹起されたのであるが、しかし 50 年代になると、鐵道建設と恐慌とのあいだにはもはや密接な關連は認められなくなつてゐる。かんらい鐵道建設などの土木事業は、それ自體として資本主義發展の時代的區

20) Matthews, *ibid.*, p. 197

21) *Ibid.*, p. 161, 1825 年の投機はロンドンを中心としたのにたいし、1836 年はランカシアが中心となつた。
(*ibid.*, p. 162)

22) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 256

23) Matthews, *ibid.*, p. 112

24) Marx, *Das Kapital*, Bd. III S. 530 邦譯岩波文庫版 (10) 689 頁

を決定するものではない。したがってまたそれは、確立期の資本主義に特有な周期的恐慌にとっての必然的要因をなすものでもない。ただししかしこうした長期の建設事業が、つねに恐慌をもって終るこの時代の繁榮の有力な誘因をなしている點は正しく評價されねばならない。ここで、鐵道建設などの特別な投資と一般産業活動との關連を考えてみよう²⁵⁾。

30年代のばあいもそうであるように、鐵道建設などの長期事業が開始されるのは一般に金融緩慢の時期である。金融市場に集中された比較的短期の産業資金は鐵道投資のために一定期間固定されねばならない。こうした金融市場への壓迫とならんで、商品市場では生産資本の諸要素が一方的にひき上げられ、代りに資金が投ぜられるのであるから、需要は供給要素を伴うことなしに増大して、生産手段および生活資料の價格は騰貴せざるをえない。それと同時にこのような長期事業に直接または間接に關係する部面の消費的需要が増大し、こうした關係は、不況期からもちこされた價格の停滯を一般に上昇に轉ずるものとして作用するであろう。鑛工業などの、急速な生産増大の可能な部面では、生産はしばしば投機的取引を伴いつつ擴張される。價格の一般的騰貴とともに食料および原材料の輸入も促進されうるのである。賃銀も産業豫備軍の動員とともに一般に昂騰することになる。このようにして長期の建設事業は恐慌をもって終る繁榮の有力な誘因をなすものといえるのであるが、金融市場と商品市場と労働市場とをとおしてつくり出されるこの關係は、産業資本としての綿工業を基軸として、みずからの發展のうちに産業豫備軍を形成しつつ、他方ではその生産擴大のうちに形成される社會的資金を主として短期の金融市場を媒介として利用するという、特有な發展形式をつくり出した19世紀中葉のイギリス資本主義のもとで、はじめて現實的に展開されたのであつた。かくてわれわれはこうした誘因によつて生じた30年代の繁榮を、代表的産業たる綿工業を中心として考察することにしよう。

III.

1833—36年の4年間は連続的な豊作の年であつた。このため穀物の輸入高も前4年にくらべていちじるしく減少した。これが繁榮の一條件をなしたことはいうまでもない。小麥價格は、たとえば33年末には1クオター49.4シリング、34年には41.1シリング、35年には36.5

シリングというふう到低落傾向を示している²⁶⁾。

さて綿工業は1833—36年に、ちょうど1824—25年のときと同様に急速な生産擴張をなしとげた。多數の紡績工場が建設され、また多くの紡績業者はその紡績工場に力織機の工場を附置した。1829年から35年に、力織機の數は5萬6千から11萬に増大したといわれる²⁷⁾。それと同時に、主として綿工場建設に伴つて煉瓦の生産高も33年以後急速に増大して36年に頂點に達している。この煉瓦生産の増大はとくにランカシアにおいて顯著であつた²⁸⁾。棉花およびキャラコの年平均價格はつぎのように騰貴して36年の最好況期に頂點に達している²⁹⁾ (第9表)。また33年7月と比較した35年および36

第9表

	原綿價格 (税込) —封度ペンス—	キャラコ (72 $\frac{7}{8}$ calcioes) の販賣價格	
		シリング	ペンス
1832	7.2	8	0
1833	8.9	8	6
1834	9.1	9	0
1835	10.5	9	9
1836	10.3	10	0
1837	7.6	8	3

年の各7月における主要商品 (ロンドン市場) の價格騰貴率はつぎのようである³⁰⁾ (第10表)。このばあい綿工

第10表

	1835年7月	1836年7月
棉花價格(ジョルジア)	+25 %	+31 %
羊毛(スペイン)	+33	+22
絹絲(イタリア)	+17	+40
粗鐵(イギリス)	-9	+60
鉛(イギリス)	+32	+95
砂糖(ハバナ)	+23	+80
藍(東インド中等品)	+31	+45
タバコ	+22	+44

業における蓄積の増進を反映して原綿の騰貴率はキャラコのそれよりも大きい。綿業労働者の賃銀も、つぎのとおり34年以後上昇に轉じて、最好況期および恐慌期の36—7年に頂點に達している³¹⁾ (第11表)。

25) この點については『資本論』第二卷第十六章第三節「可變資本の回轉の社會的考察」を参照。

26) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 247

27) *Ibid.* p. 264

28) Matthews, *ibid.*, pp. 113—115

29) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 263.

30) Tougan-Baranowsky, *ibid.*, p. 67 邦譯 67 頁

31) Matthews, *ibid.*, p. 148; p. 221

第 11 表

	週當り・ペンス
1832	114
1833	114
1834	115
1835	116
1836	117
1837	117
1838	116
1839	112
1840	112
1841	113
1842	113

こうした生産増大および価格騰貴にともなって棉花の輸入はしだいに増大し、34 年末には原綿在荷量は減退して 35 年の年平均價格が急騰をみる一方、輸入もまた同年にいちじるしく増大している³²⁾(第12表)。こうした生産および買付の擴大が投機を附隨したことはいうまでもない。一方、綿製品の輸出はつぎのような増進を示している³³⁾(第13 表)。

第 12 表

	原綿輸入量 (百萬封度)	原綿在荷量 (年末) (百萬封度)	アップランド綿 平均價格
1832	287	104	6 $\frac{5}{8}$
1833	304	94	8 $\frac{1}{2}$
1834	327	82	8 $\frac{5}{8}$
1835	364	90	10 $\frac{1}{4}$
1836	407	116	9 $\frac{7}{8}$
1837	407	116	7

第 13 表

	公表價格 (£m)	申告價格 (£m)
1832	43.8	17.3
1833	46.3	18.5
1834	51.1	20.5
1835	52.3	22.1
1836	58.6	24.6
1837	51.1	20.6

もちろん、この時代の最大の輸出品は綿製品であった。たとえば 38 年には、綿製品 16.7, 綿糸 7.4, 羊毛製品 5.8, リンネル 3.6, 鋼鐵 2.6, 金物 1.5, その他 12.2 (以上、單位百萬ポンド) となっている³⁴⁾。

さきにも述べたように、1835—36 年にアメリカ合衆國への輸出が異常な増進をみた³⁵⁾ ことが 30 年代の好況の特徴をなすものであった(第 14 表)。35 年、36 年の對アメリカ輸出は 34 年のそのほとんど 2 倍に達する飛躍的増進を示している。

32) Ellison, *Cotton Trade of Great Britain*, 1886, Tables No. 1; Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 263

33) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 263

34) Matthews, *ibid.*, p. 43

35) *Ibid.* pp. 43—45

第 14 表

	アメリカ合衆國の貿易量	アメリカ合衆國へのイギリスの輸出 (£m)
1832	98	5.5
1833	99	7.6
1834	95	6.8
1835	112	10.6
1836	118	12.4
1837	103	4.7
1838	97	7.6
1839	109	8.8
1840	95	5.3
1841	98	7.1

以上のような生産および買付の擴大に必要な資金の需要増加がイングランド銀行を中心として個人銀行、株式銀行およびビル・ブローカーなどの手で、主として手形の割引、再割引の形式で融通されたことはいうまでもない。したがって市場割引率は 33 年の低水準から上昇に轉じているが、しかし一方では「再生産過程が過度の擴張状態に先立つ繁榮の状態に達したならば、商業信用は非常に大きな擴張に達し、そのばあいこの擴張は、事實上ふたたび容易にはいりくる還流と擴大された生産という『健全な基礎』をもつ。この状態にあつては利子率は、その最低限度以上に上昇するとはいえ、依然としてなお低い。實際このときこそは低い利子率したがつてまた貸付可能な資本の相對的豊富さが産業資本の現實的擴張と一致するといわれうる唯一の時點である。」³⁶⁾のみならず金融市場に集中する資金自身も生産活動の擴大にともなって増大する。こうした利子率の比較的低位はやがて「豫備資本なしに、またはおよそ資本というものなしに仕事をする、したがつてもっぱら貨幣信用にたよつて操作する騎士たち」³⁷⁾をうみ出すにいたる。投機はしだいに蔓延する。こうした諸過程は次表(第 15 表)に明らかである³⁸⁾。なおこの時期における諸銀行の前貸の増大は、

第 15 表

	市場割引率 (%)	爲替手形量 (£.m)	イングランド銀行による割引手形 (£.m)	イングランド銀行割引率 (%)
1832	3.15	194.1	2.2	4.00
1833	2.73	204.9	1.3	4.00
1834	3.38	211.6	2.2	4.00
1835	3.71	229.6	2.8	4.00
1836	4.25	280.3	4.5	4.39
1837	4.44	258.7	7.6	5.00

36) Marx, a. a. O., S. 532—533 邦譯 264—265頁

37) A. a. O., S. 533 同 265 頁

つぎのごとくイングランド銀行におけるロンドン銀行業者の預金の減少傾向にもあらわれている³⁹⁾(第16表)。

第16表

	£m
1832	1.4
1833	1.4
1834	1.1
1835	0.9
1836	0.8
1837	1.3

このばあい、さきに述べた‘stock company mania’とともに、とくに33年以來大量に新設された「株式諸銀行がブームの金融に——とくにロシアにおいて——大きな役割を演じた。」⁴⁰⁾ 個人銀行と異なってこれらの株式銀行は主として割引手形の再割引に従事した⁴¹⁾ のであって、生産拡大と買付に伴った一般的な投機傾向をいちじるしく助成したものとみることができる。

一方ではまたこの時期の輸出がしばしば長期信用を利用して擴張された點が特徴的である。輸出貿易においては、1816年および1825年の恐慌以來、前貸をえてインドその他に商品の委託販賣をするという制度が生じ、30年代に普及するにいたった⁴²⁾が、この制度は、船荷証券を擔保に前貸することから、すすんでは生産物の製造前にも前貸するというふうに、しばしば6ヵ月以上の長期信用を利用してのたんなる前貸の制度にまで擴張されて、ついには破綻に陥っているのであって、その最も顕著な例を提供したのは1847年の恐慌である。海外貿易におけるこうした信用取引の制度が、割引商會をとおしてその融通を媒介されるロンドン金融市場の資金に依存したことはいうまでもない。がんらい當時のビル・ブローカーをとおして提供される融資は商品ブローカーを媒介として貿易商人にきわめて有利な地位をあたえることができた。したがって輸入商人もまた植民地生産物の船荷証券で前貸をえることから、さらに植民地における成育中の生産物にたいして振出された手形によっても前貸を受けることができたのであった。それがまた輸入商人の取引の擴大をうながすものとなった⁴³⁾。一般にこうした遠隔地の信用取引が、とくに長期の流通期間を必要とする輸出取引が市況にあたる影響はさきの鐵道建設のばあいと同様の性質をもつものであって⁴⁴⁾、このように19

38) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 267

39) *Ibid.*, p. 267

40) Matthews, *ibid.*, p. 198

41) *Ibid.*, p. 196

42) Clapham, *An Economic History of Modern Britain — The Early Railway Age 1820—1850*, 1950, pp. 254—262

43) 海外信用取引の實情とその意義については『資本論』第三卷第五篇第二十五章「信用と假空資本」および第三十一章「貨幣資本と現實資本II」を参照

世紀2, 30年代以後のイギリス金融市場を前提とした貿易融資による輸出入の擴大とその破局とは、當時の周期的恐慌に固有の型態的特徴の一つをなすといえるのである。

IV.

以上のような貿易擴大の過程はイングランド銀行の金準備の運動として表現される。左表(第17表)によって、

第17表

	輸出申告價額にたいする輸入評價額(再輸出分を控除)の百分比率
1832	125
1833	132
1834	137
1835	127
1836	142
1837	145
1838	142
1839	153
1840	158
1841	143

「輸入と輸出との比率の運動は、金流入の時期たる1835年には貿易差額の顕著な改善を、また金の流出しつつあった1839年には顕著な悪化を示唆していることがわかる。」⁴⁵⁾ 33—34年は輸入は輸出に比して増大し、32年から33年まで順調を示した外國爲替相場は33年末から

轉換を生じて金流出は35年春までつづいた。しかし35年は、合衆國への異常な輸出擴張によって爲替は順に轉じ、金流出は停止したが、36年には輸出量は前年に比して7%の増加をみたのにたいして、輸入量のほうは17%も増加し、同年春から9月にかけてふたたび爲替は逆となり、金流出が生じてイングランド銀行の金準備は減退をつづけた⁴⁶⁾。金準備の運動が利子率の運動と密接な関連のあることはいうまでもない。さきの利子率の推移を金準備の變化と對比してみよう⁴⁷⁾。(第18表)

第18表

	イングランド銀行の地金(£m)	イングランド銀行割引率(%)	市場割引率(%)
1832	6.8	4.00	3.15
1833	10.4	4.00	2.73
1834	8.1	4.00	3.38
1835	6.4	4.00	3.71
1836	6.3	4.39	4.25
1837	6.0	5.00	4.44

44) この點については、『資本論』第二卷第十六章第三節「可變資本の回轉の社會的考察」を参照

45) Matthews, *ibid.*, p. 86

46) *Ibid.*, p. 92; Tougan-Baranowsky, *ibid.*, p. 68, 邦譯 68 頁

47) Gayer, Rostow, Schwartz, *ibid.*, p. 297

さらに立ちいって 36 年以後の各四半期における金準備の變動をみると、つぎのようである(第 19 表)⁴⁸⁾。36 年 5 月以來、主としてアメリカへむけて金流出がはじまり、7 月には金準備がいちじるしく減退した結果、同月

第 19 表

	イングランド銀行の地金 (£m)
1835: I	6.3
II	6.2
III	6.3
IV	7.1
1836: I	7.8
II	7.4
III	5.7
IV	4.3
1837: I	4.1
II	4.7
III	6.3
IV	8.9

第 20 表

	平均市場割引率 (%)
1835: I	3.5
II	3.8
III	3.8
IV	3.8
1836: I	3.6
II	3.5
III	4.5
IV	5.3
1837: I	5.5
II	4.8
III	3.8
IV	3.4

21 日にイングランド銀行割引率は 4.5 % に引き上げられ、さらに 9 月 1 日には 5 % の高水準へと引き上げられた⁴⁹⁾。一方、平均市場割引率も上掲のような昂騰を示した⁵⁰⁾(第 20 表)。金融は明らかに逼迫を告げるにいたったのである。このばあい、こうした逼迫の直接の導火線をなしたのは、さきにも述べたアメリカのパニックであった。「[アメリカにおける] この時期のあらゆる投機において最大の役割を占めていた『合衆國銀行』はその金庫の保金のために 100 萬ドルの借入金をロンドンで契約せねばならなかった。他の諸銀行も彼らの金庫を強固にするためにできるだけの手段を講じた。それゆえ 1836 年の夏ロンドン取引所は、アメリカの諸銀行が現金に換えるために賣りに出したアメリカ諸証券で充滿していた。」⁵¹⁾かくてイングランド銀行は 9 月に割引率 5 % 引上げを決

第 21 表

	1836 年 6 月と比較した 1836 年 11 月の商品価格下落率		1836 年 7 月と比較した 1837 年 7 月の商品価格下落率
棉花(ジョルジア)	26 %	棉	45 %
鉛 (イギリス)	11	花	
粗鐵(イギリス)	13	タ	31
銅 (イギリス)	7	バ	
砂糖(ハバナ)	11	コ	20
錫 (イギリス)	18	砂	
		糖	44
		鐵	29
		銅	39
		錫	33
		鉛	31
		イタリア生絲	

するとともに、アメリカ關係の金融商社にたいする信用拒否の態度に出た。一方ではまたこれらの商社自身の不信が相ついでつたえられ、ロンドン市場の割引率の昂騰をうみ出す結果となったのである。

「金屬流出は、たいていは、對外貿易の状態における一變化の徴候であり、そしてこの變化はまた、諸關係がふたたび恐慌へと成熟しつつあることの一前兆である。」⁵²⁾もつとも 36 年の對外的流出によって失われた金準備の額は約 250 萬ポンドで、34 年のそれよりも小さかつたし、また利子率の騰貴は大陸諸國からロンドンへの多量の短期資金の移動を惹起したといわれる⁵³⁾。36 年の 9 月にはようやく金の對外的流出は阻止され、また爲替相場にも轉換を生じた。しかしイングランド銀行の金準備は依然として減退をつづけた。明らかに國內的流出がはじまったのである。「國內的流出は非常に異なる。そうした流出は國內の信用阻害がら生ずる。そしてこれを處理する困難さは一そう大きい。というのは、それはしばしば對外的流出によって惹起されるか、またはすくなくともこれによって強化されるからである。……この二つの疾病—對外的および對內的流出—はしばしば同時に金融市場を襲ってくる。」⁵⁴⁾ こうした國內流出の最初の契機は 36 年の秋にアイルランドからあたえられた。アイルランド諸銀行間の支拂停止の噂さがひろまるにつれて、9 月にはロンドンからアイルランドへの金流出が感ぜられはじめた。10 月には爲替相場は改善され、アイルランドの窮迫も一時中絶したにもかかわらず、金はひきつづきイングランド銀行から流出した。11 月にはランカシアの株式銀行『ノーサン・アンド・セントラルバンク』がイングランド銀行に援助を乞うにいたった⁵⁵⁾。このような金融恐慌にはじまって、11 月には諸商品の価格はいつせいに崩落を開始した。37 年にはいとさらにはなはだしい下落を生じた⁵⁶⁾(第 21 表)。

48) Matthews, *ibid.*, p. 199

49) Clapham, *The Bank of England, A History*

1945, Vol. II, p. 429

50) Matthews, *ibid.*, p. 201

「1837年のはじめ5ヵ月間は、爲替相場は(2月をのぞき)イギリスに順であったにもかかわらず、イングランド銀行の保有正貨はきわめてわずかであった。……恐慌は6月にその頂點に達した。この月のあいだに、對アメリカ貿易のうゑに投機し、またアメリカ輸入業者に巨大な信用をあたえた三大商會がその支拂を停止せねばならなかった。彼らの債務は500萬ポンドにのぼった。倒産數は1837年には1836年と比して54%増加した。すべてのイギリス産業部門のうちで最も恐慌の打撃をこうむったのは綿工業であった。」⁵⁷⁾綿製品の輸出も、前掲の表(第13表)の示すように、37年にはほとんど34年の水準にまで減退した。

V.

以上で明らかのように、綿工業を基軸として産業資本的基礎を確立した1830年代のイギリス資本主義は、32年あたりから好況に轉じてまもなく35年5月における取引所パニックを先行せしめたのち、35—6年には熱狂的な株式投機をともしつつ、對アメリカ輸出を中心とした對外貿易の異常な擴大過程のうちに大規模なブームを展開したが、36年春にはじまった金の流出につづいて、秋には金融パニックを惹起し、ついで同年暮から翌年にかけて、ふたたび本格的な産業恐慌におちこんだのであった。

マルクスは『資本論』第三卷第五篇で、恐慌と金の運動との問題に關連してこう述べている。恐慌を惹起した國では「過剰輸入(Uebereinfuhr)と過剰輸出(Ueberausfuhr)とが生じた、すなわち信用とそれに伴う一般的な物價昂騰とによって助長された過剰生産が生じたのである。」⁵⁸⁾「[恐慌を惹起した—引用者]これらすべての國民は過剰輸出(すなわち過剰生産)すると同時に過剰輸入(すなわち過剰取引(überhandelt))した、すべての國で物價が昂騰し、信用が過度に擴張された。」⁵⁹⁾マルクスはまた『銀行條例』(1857年)におけるウィルソンの質問「第5145號。昨年のように加工商品の輸出が

二千萬ポンドも増加したとすれば、この増加した商品量を生産するために、前もってすでに非常に大きな原料輸入の増加があったはずではないか？」を引用して、「こうしてすでに、過剰輸出は過剰輸入と同じであり、また過剰生産は過剰取引と同じである」という註釋をほどこしている⁶⁰⁾。

ここで過剰の輸出入というのは、「あまりに多く(zuviel)輸出および輸入しており、したがって支拂差額〔いわゆる貿易差額とは區別して、一定の時期に決済をせまられた貿易上の支拂差額—引用者〕が逆⁶¹⁾となる事態を指すものと解することができる。こうした過大貿易が同時に國內的には「信用とそれに伴う一般的な物價昂騰によって助長された過剰生産」としてあらわれるというのである。あるいはいいかえると、いわゆる市場供給過多は過剰輸出としてあらわれる、そしてそれはまた過剰輸入を前提し、または結果するというふうに、貿易關係の擴大過程をとおして現實の恐慌が成熟するというのである。しかしこうした現實的關係は、ここでマルクスの想定しているように、イギリスを中心とした19世紀中葉の資本主義國に典型的に妥當し、したがってまた19世紀20年代から60年代までの周期的恐慌に多かれ少かれ共通した關係であるという點に留意しなければならない。それは冒頭でも述べたとおり、原料品および穀物を輸入して工業製品を輸出するというふうに、イギリスを工業國とし、他の諸國を大體において原料および食糧供給國とした、確立期の資本主義に對應した世界市場を前提として發生する現實的恐慌關係にほかならなかつた⁶²⁾。

これを1830年代についていえば、35年以來、過大の信用を利用した對アメリカ輸出において異常な擴張をみる一方、36年には輸入の増大率が輸出のそれを超過するといった、擴大された貿易關係のもとで、36年春から9月にわたって生じた連続的な金流出は、すでに國內的には信用の過度の緊張によって維持された外觀的繁榮のもとで成熟しつつあった恐慌の先驅的現象をなすものであった。こうした金流出は、投機的物價昂騰に伴う資金需要の増加という要因とともに、いちように利子率の昂騰として表現され、かくて同年の夏の株式投機の破綻とそれにつづく金融恐慌を惹起したのである。それと同時に、依然として最好況期における高賃銀が維持される一方、はやくも商品市場では投機的買付による商品在荷の

51) Tougan-Baranowsky, *ibid.*, p. 70 邦譯 71 頁

52) Marx, a. a. O., S. 617 邦譯岩波文庫版(10) 403 頁

53) Matthews, *ibid.*, p. 93

54) Bagehot, *Lombard Street* 1906, p. 49 邦譯岩波文庫版 58 頁

55) Matthews, *ibid.*, pp. 172—173

56) Tougan-Baranowsky, *ibid.*, pp. 73—74 邦譯 74—75 頁

57) *Ibid.*, pp. 74—75 邦譯 75 頁

58) 59) Marx, a. a. O., S. 536, S. 537 邦譯 271—272 頁。

60) A. a. O., S. 579—580 同 342 頁

61) A. a. O., S. 536 同 270 頁

62) 恐慌と外國貿易との關係については宇野弘藏『恐慌論』序論を参照

累積によって物價低落の兆をみせはじめ、投機的擴張に従事した製造業者および商人は、利子率の奔騰をうんだ金融パニックのもとで、多額の資本を生産手段および商品の形態で保有しながら、支拂不能に陥らざるをえなかった。こうして勃發した36—7年の恐慌は、35—6年の繁榮の主たる原因が對アメリカ輸出にあったことと對應して、その激烈な影響範圍は對アメリカ取引に集中されたのであった⁶³⁾。

この恐慌のあとをうけてふたたび5年ないし6年の不況が大體1842年にいたるまでつづくのであるが、この不況過程はこの時期の特殊な諸事情によって特殊な様相を呈した。すなわち「1837年の恐慌—それは長い後陣痛を伴い、1842年にもなお—の完全な後續恐慌がつながった」⁶⁴⁾のである。38年から39年にわたって、爲替相場下落と異常な金流出がつづいた。これは、この二年間の凶作による輸入増加や、ベルギー、フランス、とくにアメリカの金融逼迫によるものであって、39年にはアメリカに端を發した再度の金融恐慌におちいったのであるが、この影響はそれ以上には波及しなかった。すでに38年には若干の輸出改善の徴もみえはじめたものの、依然として市況は停滯を維持し、綿製品の在荷の累積も増大をつづけたといわれる。翌39年から40年へと一時的

63) 『第836號。1837年の逼迫は1847年のそれとはまったく比較にならない。1837年の逼迫は主として對アメリカ取引に限られていた』Marx, a. a. O., S. 605 邦譯 383 頁

64) Marx, a. a. O., S. 600 同 376 頁

恢復を示したが、41年、42年にはふたたび逆轉し、市況はいちぢるしい沈滞におちいった。前二年に伸張した綿製品輸出はまたも減退に向い、多くの製造業者は海外への廉賣を餘儀なくされたといわれる。棉花の消費量も極度の減退をみたのである⁶⁵⁾。しかしこうした不況過程において、これを切りぬけるための競争をとおして、生産費の引き下げを目ざす生産方法の改善もしだいに普及していった⁶⁶⁾。「後續恐慌」を現出した37年以後の不況過程も不況としての一般性を變更せしめるものではなかった。この過程を基礎として、43年以後ふたたび新たな恢復が、やがてまた49年の恐慌をもって終る繁榮が、はじまるのである。 —1954・10・11—

65) Matthews, *ibid.*, pp. 137—143; Tougan-Baranovsky, *ibid.*, pp. 77—82. 邦譯 77—83 頁。但しツガンの記述は1839年の金融恐慌に言及しているだけで、1842年の「後續恐慌」にはなれていない。

66) 「『資本の大なる減損』が嘆かれている時期に、若干の新しい諸工場がひきつづき建設されたということは、それ自體としてかならずしも矛盾ではない。なぜなら、より新らしい、またより能率的な諸工場は他の工場がなしえぬときに、疑いもなく利潤を生ずることができるからである。」Matthews, *ibid.*, pp. 140—141 「ランカシア綿工業における全馬力(蒸氣力および水力)は1835年はじめには23,000を少し超え、三年後には約34,000であった。1841年末には約38,500であった。」 「ランカシアの工場監督官レオナード・ホーナーは、綿織物を生産する『新工場または追加工場』における一定諸年につくられた馬力数をつぎのように集計している、—1839, 641; 1840, 1513; 1841, 1172」Matthews, *ibid.*, p. 140